

IVF産子の分娩・哺育の注意点（参考情報）

一般社団法人家畜改良事業団
岡山種雄牛センター

はじめて IVF 産子の分娩や哺育をされる皆様に、分娩時の注意点、初乳の与え方など哺育時の留意点をまとめました。

せっかく受胎した産仔ですので、丈夫で健康に育成いただき収益向上にお役立てください。

1. 分娩に関する注意

- 分娩日が近くなったら注意して下さい。
- 分娩予定日より在胎日数が伸びる事は、過大産子の発生につながると思われれます。
- 分娩予定日が過ぎても生まれない場合は、担当獣医師と相談のうえ必要に応じて処置する事をお勧めします。



2. 初乳の給与

（1）給与の意義

- 新生子牛は、初乳からのみ免疫成分を摂取することができます。
- 生後約10時間を経過すると、免疫成分の吸収量は半減すると言われています。
- 十分な免疫成分を摂取するためには、免疫製剤を初乳に添加することも効果がある様です。

（2）給与のタイミング

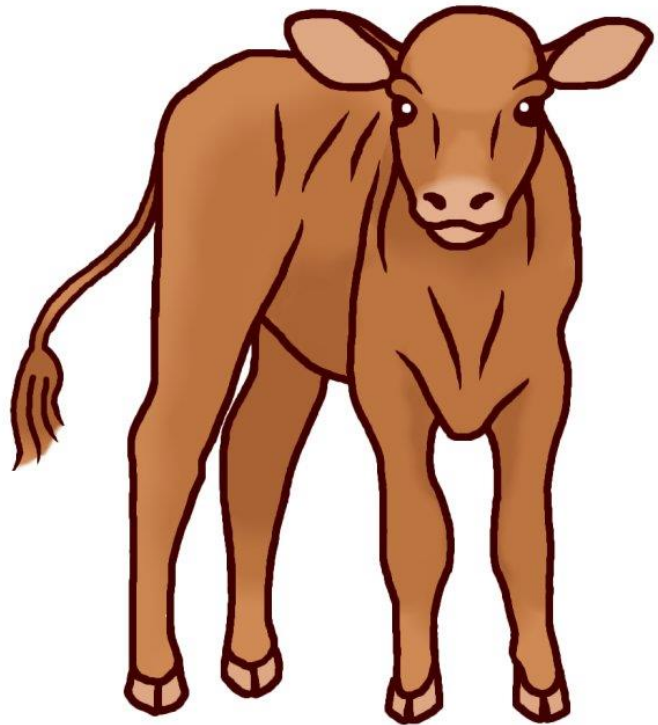
- 子牛が生まれたら「なるべく早く初乳を飲ませる」が基本です。
 - ・哺乳欲を示した子牛は生後6時間以内の早い時期に与えてください。
 - ・分娩直後の衰弱子牛の場合は呼吸が安定してから給与してください。

(3) 初乳の給与量

- 出生時体重の約5%が目安と言われますが、欲しがるようならさらに追加してください。

(4) 給与時の注意

- 初乳を介して子牛に感染する病気（牛白血病、ヨーネ病など）があるため、母牛の健康状態に注意してください。
- あまった初乳は凍結保存（保存期間は約半年間）しておき、必要時に45～50℃の湯煎で素早く温めなおして給与することをお勧めします。
- 必要に応じて初乳粉末も利用できます。初乳粉末は飼料メーカー等で販売されているので担当者にご相談ください。



3. 哺育

- 哺育量は、哺育初期から1～2カ月程度で徐々に投与乳量を増やしてください。
- 哺育回数は、朝晩の2回を確実に飲ませてください。可能であれば3～4回に分けて与えてください（規則正しい給与間隔が大切です）。

4. 哺乳期の損耗防止

この時期の子牛の病傷の大半が下痢と肺炎であり、黒毛和種の死産率の半数がこの時期の子牛です。この時期の損耗をいかに低く抑えるかが重要です。

(1) 施設面での注意

- 子牛の飼育施設は「清潔で」「暖かく」「乾燥させる」ことが大切です。
- 牛床が尿や糞便で汚れていたり、濡れていると下痢を引き起こしやすくなります。
- とくに冬場、牛床が濡れていると床面の温度が下がり、お腹を冷やす原因になります。赤外線ヒーター、ジャケット、首巻き、お風呂マット等を使い保温に心掛けましょう（赤外線ヒーターなどでの保温の場合、脱水症状にご注意ください）。
- オガクズなどの敷料を小まめに交換し、衛生的な哺育環境を確保してください。

(2) ミルクの濃度と温度は一定に

- 子牛に与えるミルクを調整する際、温度は温度計を、濃度は計量カップを使い常に温度と濃度を一定にして与えてください。
- ミルクの温度と濃度は商品により異なりますので、確認し正確に給与して下さい。

(3) その他

- 必要であれば獣医師に相談の上、牛呼吸器病対策として鼻腔内投与型ワクチンや和牛の新生子牛はホルスタインと比較し造血機能が弱い事が知られていることから鉄剤の投与を行ってください。

